

第10回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



赤ひげ大賞

目次

3 第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

4 秋篠宮皇嗣殿下 お言葉

5 祝辞 内閣総理大臣 岸田 文雄

6 主催者挨拶 日本医師会 会長(当時) 中川 俊男

7 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長(当時) 飯塚 浩彦

8 協賛社挨拶 太陽生命保険株式会社 代表取締役社長 副島 直樹

9 表彰式

10 選考委員コメント

受賞者紹介 (順列は北から)

11 植田 俊郎 (岩手県 植田医院)

16 市川 晋一 (秋田県 仙北市西明寺診療所・桧木内診療所)

21 鋤柄 稔 (埼玉県 シャローム病院)

26 大石 雅之 (神奈川県 大石クリニック)

31 佐藤 立行 (熊本県 佐藤医院)

36 赤ひげ功労賞 受賞者

38 選考経過報告 日本医師会 常任理事 城守 国斗

39 第11回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

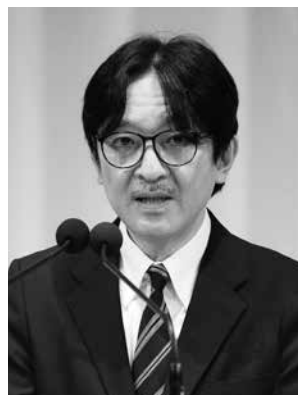


第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設(第6回より太陽生命保険株式会社が特別協賛)されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」の大賞5名と、功労賞13名の受賞が決定しました。

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
協 力	都道府県医師会
特別協賛	太陽生命保険株式会社
対 象 者	病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師(ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く)。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦
選考委員	羽毛田信吾(昭和館館長、前宮内庁参与) 向井 千秋(東京理科大学特任副学長) 檀 ふみ(俳優) ロバート キャンベル(早稲田大学特命教授) 河合 雅司(作家、人口減少対策総合研究所理事長) 伊原 和人(厚生労働省医政局長) 釜 范 敏(日本医師会常任理事) 城守 国斗(日本医師会常任理事) 鈴木 裕一(産経新聞社取締役) 乾 正人(産経新聞社執行役員論説委員長)

秋篠宮皇嗣殿下 お言葉



第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が開催され、皆様とともに出席できましたことを大変嬉しく思います。そして、本日表彰を受けられる方々に、心からお祝いを申し上げます。

この赤ひげ大賞は、地域の人々に寄り添いながら、病気の治療を行うのみならず、健康の保持や増進など、日々の暮らしを守る活動を行う「かかりつけ医」に光を当て、地域医療の発展を願って設立されたと伺っております。

近年、高齢化が急速に進む中、各地の医療現場では、離島などの地理的条件が厳しい土地に医師の存在がなかったり、都市部ではあるものの病院が撤退したり、また、診療科が偏っていたりするケースが見られます。更に、COVID-19の影響により、持病をもちながらも通院や検診を躊躇する人々も出てきております。

日本では、2020年初頭から始まったCOVID-19の感染拡大により、対面での人と人との交流に大きな制約を受けるなど、日々の生活に様々な制限を余儀なくされるようになりました。このような中であって、全国各地の医療現場での感染症対策を始め、それぞれの地域において人々の健康を守るために力を尽くされている方々に、深く敬意を表します。

このたびの受賞者は、様々な課題に使命感を持って応え、各々の地域にとってなくてはならない存在として活躍されている方々と承知しております。皆様が、今回の受賞を一つの里程碑として、今後も健康に留意されつつ、医療活動に尽力されることを願っております。

終わりに、「日本医師会 赤ひげ大賞」が、地域住民の診療や健康管理に日々携わっている医師の大きな励みとなり、地域医療の更なる発展につながることを祈念し、私の挨拶といたします。

祝 辞

内閣総理大臣 岸田 文雄



本日、栄えある赤ひげ大賞及び赤ひげ功労賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。また、支えてこられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

また、医療関係者の皆様方におかれましては、新型コロナとの闘いの最前線で、地域の医療体制を支えるため、大変なご尽力をいただいております。改めて、心から敬意と感謝を申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、長年にわたり、地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰することを目的として創設され、今年度で第10回を迎えました。

今回、受賞された皆様は、各々の地域において、地域に密着した医療を実践して地域医療を支えていただいている方々と伺っております。長年にわたり地域住民の健康を支え続けている皆様の崇高な使命感と行動力は、まさに現代の赤ひげ先生であり、全国34万人の医師の鑑となる存在です。そして、皆様の受賞は、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

我が国は、世界最高水準の平均寿命を達成し、人生100年時代の到来を見据えて、子供から子育て世代、お年寄りまで、全ての方が支え合う、持続可能な全世代型社会保障の構築が大きな課題となっています。また、国民一人一人が、住み慣れた地域で、安心して健康的な生活を送り、活躍するためには、地域の方々に寄り添い、頼りにされる皆様のようなかかりつけ医の役割が非常に重要です。

新型コロナへの対応においても、自宅療養者への対応に当たり、かかりつけ医の重要性を、改めて、強く認識いたしました。

国民一人一人の健康管理や、患者が直面する治療と生活の質の確保は、まさに医療の本質・基盤です。地域にいる赤ひげ先生だからこそ解決できるこのような課題に対応するためにも、かかりつけ医機能が発揮される制度整備など、身近なところで、医療・介護が切れ目なく提供される体制の構築を、日本医師会とも協力しながら、進めてまいります。そして、世界に冠たる国民皆保険制度を次の世代にしっかりと引き継いでまいります。

「日本医師会 赤ひげ大賞」がますます発展されること、また、皆様方のますますのご活躍をお祈り申し上げて、私のご挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございます。

日本医師会 会長(当時) 中川 俊男



本日ここに、秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席を賜り、ご来賓の岸田文雄内閣総理大臣を始めとする多くの皆様のご出席の下、第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を遂行させていただきますことは大変名誉なことであり、心から感謝いたしております。

さて、新型コロナウイルス感染症との闘いも3年目となりましたが、感染者数が増加し、医療が逼迫する中においても、日本全国の医師はコロナ医療とコロナ以外の通常医療に加えて、ワクチン接種にも携わるなど、地域医療を守るために奮闘いただいています。

この「日本医師会 赤ひげ大賞」は、これらの先生方のように地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方の功労を顕彰するため、平成24年に創設したのですが、今回で10年目の節目を迎えることができました。

ご協力いただきました都道府県医師会に感謝いたしますとともに、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、特別協賛いただきました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げます。

今回は、5名の先生方を「赤ひげ大賞」に、13名の先生方を「赤ひげ功労賞」に決定いたしました。受賞者の皆様には、改めてお祝い申し上げます。

受賞された先生方はいずれも、各地域において献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚い、まさに「現代の赤ひげ先生」としてご活躍されている方々ばかりであります。

日本医師会は今後も全ての人々が安心して暮らせる、かかりつけ医を中心としたまちづくりの実現のため、地域の医師の方々へのバックアップに全力で取り組んで参ることを改めて申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠におめでとうございます。

産経新聞社
代表取締役社長(当時) 飯塚 浩彦



「赤ひげ大賞」、「赤ひげ功労賞」受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、この度のご受賞、誠におめでとうございます。

地域住民の「かかりつけ医」として、日々奮闘されている皆様に、心から敬意を示すとともに、深く感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大は、私たちの価値観や生活スタイルを一変させました。変化が求められる日常の中で、いかに健康に毎日を充実させて生きるかは社会的な課題です。

産経新聞社は報道機関として、紙面での提言やイベント等を通じ、日本の医療の充実、更には国民の長寿と健康的な生活の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存です。

ただ、国民一人一人の健康を支えるのは、地域に深く根差した医療であり、その医療活動に携わる医師の皆様、医療関係者の皆様であります。今後とも皆様のご尽力を心よりお願いしたいと思います。

結びになりますが、「赤ひげ大賞」の開催にあたり、ご協力をいただきました厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、ご尽力いただきました選考委員を始めとする関係各位の皆様、特別協賛をいただいております太陽生命保険株式会社様にお礼申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

太陽生命保険株式会社
代表取締役社長

副島 直樹



「赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆様、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。2021年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症が世界的猛威を振るう年となりました。そのような中、受賞された先生方を始め、新型コロナウイルス対策に尽力されている全ての皆様に、心から敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は、現在の大きな社会的課題と言えると思います。健康への直接的な影響はもちろん、コミュニケーションが希薄になることや、正しい情報を選択できず、不安やストレスを抱えるなどの間接的な影響も深刻な課題となっています。

そのような状況において、地域に根差し、人々に寄り添い、信頼関係もある「かかりつけ医」の先生方の存在はますます重要になっています。何かあったら先生に相談できる、という安心感は地域住民にとって計り知れないものだと思います。これまで以上に過酷な状況の中、医療現場の最前線で地域医療のために昼夜問わず献身的に活動される皆様の姿にとっても感銘を受けました。

当社では、社会的課題の解決という保険会社の責務を全うすべく、確実に保険金をお支払いするという従来の役割だけでなく、疾病の予防と保障が一体となった商品のご提供を通じて、お客様の健康増進をサポートするという新たな役割にも取り組んでいます。

人生100歳時代においては、「元気に長生き」することが重要であり、そのためには疾病の「治療」だけでなく、病気の兆候を早期発見するなどの「予防」への取り組みが欠かせません。地域住民に寄り添い、適切な治療だけでなく予防にまで携わられる先生方のように、当社もお客様に寄り添い、疾病を予防し、お客様の元気で長生きな暮らしをサポートするために、早期発見に役立つサービスをご案内しています。今後とも、お客様の安心で豊かな暮らしを支える保険会社となるために、更なる取り組みを進めていきます。

地域医療の更なる発展につながることを願うとともに、「赤ひげ大賞」をより多くの方々に知っていただくために、当社も微力ながら支援してまいります。

末筆ではございますが、受賞者の皆様と全国各地の赤ひげ先生のますますのご活躍と、日本医師会及び産経新聞社のご関係者の皆様のご健勝を心より祈念申し上げてご挨拶とさせていただきます。受賞された先生方、誠におめでとうございます。

第10回 表彰式



表彰式は令和4年5月12日、秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご臨席の下、岸田内閣総理大臣、佐藤英道厚生労働副大臣を来賓に迎えて東京都内で開かれた。

式典で秋篠宮皇嗣殿下は「受賞者は地域にとってなくてはならない存在として活躍されている方々と承知しております」と述べられた。

岸田総理は「皆様の受賞は、地域医療に携わる医師の方々の励みとなる」と祝福、日本医師会の中川会長(当時)は「受賞者はいずれも患者の信頼が厚く、まさに『現代の赤ひげ先生』だ」と受賞者をたたえた。産経新聞社の飯塚社長(当時)は「国民の健康を支えるのは地域に根差した医療であり、今後も尽力をお願いしたい」と挨拶した。



昭和館館長、前宮内庁参与
羽田 信吾 委員

へき地や離島で活躍する医師の受賞がこれまで多かったが、今回、都市部でギャンブルやアルコール依存の人をケアする医師が選ばれ、「赤ひげ先生」の定義を広めることができた点で大きな意義がある。



東京理科大学特任副学長
向井 千秋 委員

自分が医師として働いた経験があるので、選考で甲乙つけるのは覚悟が必要で難しい。その中でも、長年続けているかどうかや、年齢層・取り組みなどの多様性を重視した。大賞に女性がいないのは少し寂しい。



俳優
檀 ふみ 委員

選考では、“私の主治医だったらどんな先生がいいか”をイメージし考えたが、他の委員の意見を聞きながら“こんな見方もあるのか”と余計迷ってしまった。参加年数を重ねるごとに「赤ひげ先生」に対する考え方は深まってきている。



早稲田大学特命教授
ロバート キャンベル 委員

新型コロナウイルスの感染拡大の中、大きな病院にスポットが当たりがちで、かかりつけ医の頑張りがもっと知られていいと思う。後進の医師が見習いたいと思う先生方が選ばれ、大きな意義がある。



作家、人口減少対策総合研究所理事長
河合 雅司 委員

第1回から選考に参加しているが、この10年でかかりつけ医への期待が高まっているのを感じる。推薦される先生の年齢も若返っており、新たな人材がどんどん出てきているという点で心強く思った。



厚生労働省医政局長
伊原 和人 委員

厚生労働省にも医師がいることから、そういった職員とも議論しながら、厚生行政を担当する者として「社会的弱者への支援」「へき地への支援」といった観点で、甲乙つけ難かったが無理に点数をつけさせていただ



(春名中撮影)

自身も被災しながら救護を続け、現在も復興に尽力

植田医院 院長

植田 俊郎

《 岩手県 》

うえた・としろう 植田医院院長。昭和29年、岩手県大槌町生まれ。67歳(2022年5月12日時点)。金沢医科大学卒。日本医科大学第一内科に入局し東京都立駒込病院循環器科や白十字総合病院内科へ出向。釜石市民病院放射線科長・内科医員を経て植田医院を継承開業した。平成14年から釜石医師会副会長。

震災時、目を疑う光景を記録し続けた

岩手県大槌町の市街地を壊滅させた東日本大震災の巨大津波を目の当たりにした。異様に長く強い揺れから30分あまり。港から4,500mにあった4階建ての自宅兼病院を点検していた妻の美智子さんの「水が見える」の声に屋上まで駆け上がった。趣味のカメラのレンズ越しに見た町は「黒く渦巻く海に沈んでいた」。信じられない光景にシャッターを切り続けた。

震災2年後に自費出版にこぎつけた写真集「大槌の津波～その記録、そして出会った人々～」に23枚が解説付きで納められた。震災当日から3月18日までの体験や出来事を時系列で淡々と綴った記録も添えられ、津波の被災現場を知る貴重な資料として評価も高い。

最初の1枚は家々をなぎ倒し白い煙を上げて迫る巨大津波。時間は「15時21分?」。自宅兼病院前の通りは乾いた状態だが、「15時22分32秒」の4枚目で町は「黒く渦巻く海に沈んでいた」。わずか1、2分で4階建ての自宅兼病院は3階まで浸水。「まさか津波がここまで…」自費出版はこの記憶の風化を防ごうという強い思いからだった。

何事にも動じず気丈に振る舞う

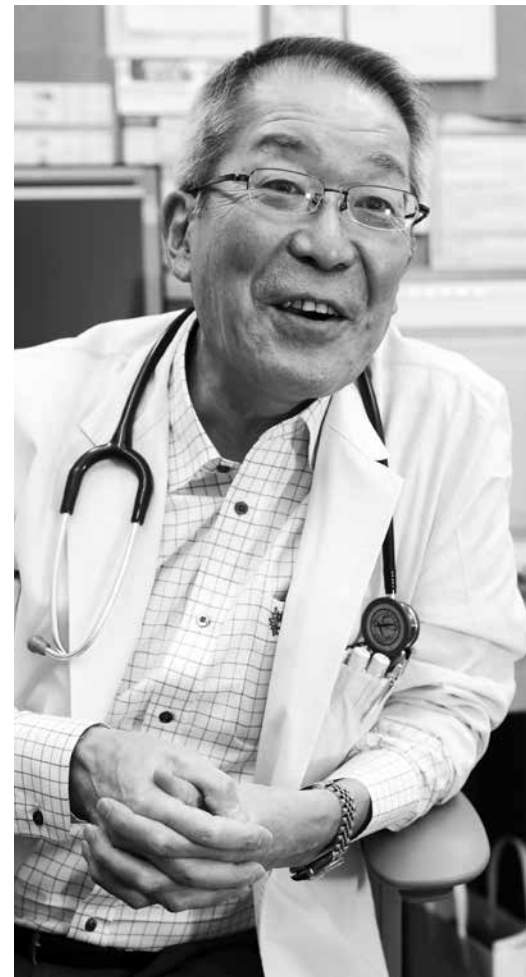
大学の山岳部時代に冬の北アルプスの縦走経験もある山男である。研修医時代に中国とパキスタン国境のカラコルム山脈にあるガッシャーブルムI峰（標高8068m）に挑む長野県山岳協会隊に隊付ドクターで参加した。本来は標高5千m台のベースキャンプに待機する役目だが、「6900mの最終キャンプまで行きました。だって登りたかったもんで」と話すほど。

吹雪や大雪の悪天候で身動きがとれず何度も雪洞を掘ってビバークした経験の持ち主は未曾有の大災害にも動じなかった。「逆に生きてやると闘志が湧いた」という。震災当日、屋上には家族2人と

従業員5人、近所の農協職員8人、町社会福祉協議会職員2人が避難、山男の経験と装備が大いに役立った。

夜になって浸水を免れた4階の自宅に移動。無事だった山道具のヘッドランプの灯りを頼りに、フライパンやガスコンロを駆使して焼き餅やカップ麺を提供。布団や毛布で暖をとり、全員が九死に一生を得られた。当人は「ビバークに比べたら何でもない」と毛布にくるまり廊下のソファで熟睡である。

翌朝、自衛隊ヘリに屋上から救助された。1、2階が流れついたがれきに埋まり、降りられなかったからだ。「さすがに自衛隊を見てこれで助かる」と



「地域をみんなで診るという意識が大事」と話す



笑顔で患者にアドバイス



平成27年に再建した植田医院の外観



医院の玄関で



医院のスタッフと

いう実感が湧いてうれしかった」と振り返る。実は自衛隊に救われるのはこれが2度目だった。高校1年生の時に寝袋持参のヒッチハイクで大阪万博に行く途中、自衛隊の兵員輸送車に拾われたことがあったからだ。

「輸送車の中は両サイドに隊員が座り、真ん中に小銃が置いてあって、『これ7・62mmのNATO弾ですよ』と尋ねたら、『お前は過激派か』と詰問されて『違います、違います』と誤解を解くのに苦労しました」と苦笑い。漫画の戦争ものの知識だったという。学校の砂場やお寺で夜を明かした若き日の冒険旅行の記憶は今も鮮明だ。

苦しい状況でも、 避難者同士で助け合う姿が

自衛隊ヘリで運ばれた避難所の寺野弓道場に救護所を設置、本来の医師の業務が始まった。持ち出したのは往診鞆だけ。避難所には着の身着のままの住民が詰めかけていた。大槌町内は県立大槌病院始め植田医院を含む6つのすべての医

療機関が被災、最優先は傷病者の傷病の緊急度や重症度に応じて治療優先度を定めるトリアージだった。

手始めに妊婦と人工透析患者の有無を確認、避難所生活が難しい高齢者を特別養護老人ホームや老人保健施設などに搬送させた。震災翌日の夕方、2人の人工透析患者に付き添い、自衛隊ヘリに同乗して青森県の三沢基地に飛んだ。当初予定の三沢市立病院は停電で対応が困難な状況だったが、受け入れ可能なのは八戸市の赤十字病院と分かり、無事収容することができた。

その夜は病院の当直室に宿泊。翌早朝、病院内の公衆電話で新潟県に嫁いだ長女や東京の知人らに無事を伝えた。市街地が壊滅した大槌町内からの通信手段がなかったからだ。津波襲来の混乱の中で自らの携帯電話も紛失していた。

震災で寸断された道路をたどり、タクシーで5時間以上かかって避難所に戻った。その目に映ったのは避難者が水汲みや薪運び、食事の準備と役割分担をして助け合う姿だった。町内の避難所となっている県立大槌高校に県立大槌病院の医師、町の



画像を慎重に確認する



震災後、最初に立ち上げた仮病院の建物をバックに

対策本部も置かれている中央公民館には3人の民間診療所の医師が活動しているのも心強かった。

しかし、寺野弓道場だけで避難者は約400人、医師は1人である。深刻な薬不足に加え、不自由な避難所生活に体調を崩す被災者も増えた。夜中の子供の発熱やけいれんの発作に対応したり、早朝からは診療、避難所生活に認知症を発症した高齢者への対応などもあり、2、3時間単位でしかまとまった睡眠が取れない日々が続いていた。

地域をみんなで診るという意識

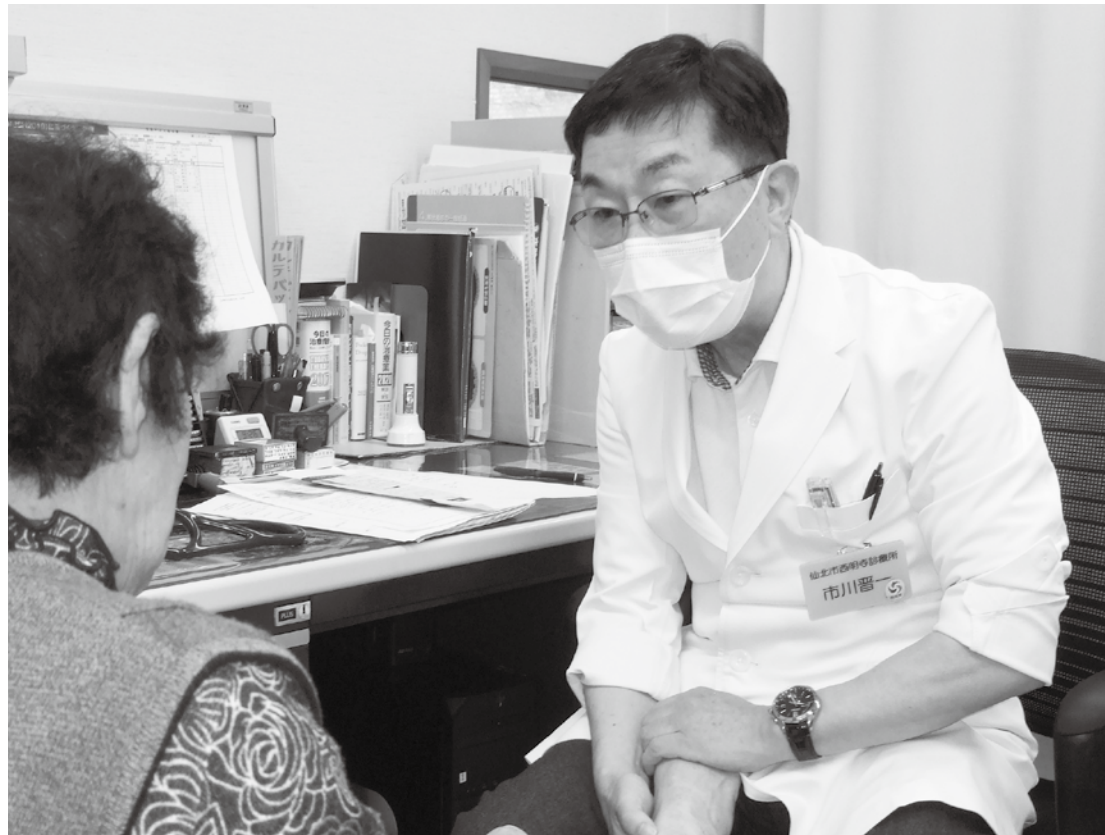
震災数日後にやってきた韓国の医師団が真顔でこう聞いてきたという。「なぜ暴動が起きないんですか」と。避難所の住民が助け合う姿から「あり得ない」と質問をとりあわなかった。3月14日には、釜石保健所から薬品が届き、全国から医療支援も相次ぎ被災地に届きつつあった。

寺野弓道場の救護所にも3月18日から長崎大学

医療支援チーム、3月30日からAMDA（旧称：アジア医師連絡協議会・特定非営利活動法人アムダ）チーム、4月18日から大阪JMATチームが参加。5月末に救護所の役割を終えると、6月から県立大槌病院仮設診療所に勤務、7月から寺野弓道場近くに仮設病院を開設、被災地の医療を支え続けた。

自宅兼医院を弓道場近くに再建できたのは震災から5年近く経った平成27年2月。県立大槌病院と連携して地域医療を担う。何事にも自然体で穏やかな人柄。平成14年から地域の医療機関のまとめ役の釜石医師会副会長を務める。「民間診療所と大槌病院の医者もスタッフもすごく仲がいい。地域をみんなで診るという意識がないと地域医療が成り立たないことを知っているから」と話す。町医者の父親に反発していた東京での浪人生活で、都会暮らしは無理と町医者になる決意をして40年あまり。東日本大震災は医師を天職にした。

（石田征広）



(山本雅人撮影)

運命に導かれた地で農村・地域医療にかける

仙北市西明寺診療所・ひのきない 榎木内診療所 所長

市川 晋一

《 秋田県 》

いちかわしんいち 仙北市西明寺診療所・榎木内診療所所長。昭和26年、兵庫県姫路市生まれ。70歳(2022年5月12日時点)。秋田大学大学院医学研究科修了。JA仙北組合総合病院(現・大曲厚生医療センター)泌尿器科長を経て、平成12年、西木村立(町村合併で現・仙北市)西明寺診療所と榎木内診療所の所長となる。

広大な地域に住民点在

平成17年に秋田県の田沢湖町、角館町、西木村が合併して誕生した仙北市。このうち旧西木村(西木地区)の唯一の医師として20年以上、住民の健康を預かってきた。

西木地区は山手線内側の約4倍の面積を誇るが、その多くは森林が占めて冬の積雪は2mを超える。約4千人の住居は山奥にまで点在し、高齢化率は50%に迫ろうとしているが、バス路線は廃止され移動もままならない。この地で医療を行うことの大変さは想像に難くない。

「高齢者のことを考えて、できるだけ地域内で医療ができるようにしたい」との考えから、西明寺診療所のほかに、山間部の榎木内の総合林業センター内の一角を借り、「分院」ともいえる榎木内診療所で週1回診療。自身が移動して診療することで住民に負担がかからないようにしている。

流暢な秋田弁で患者と自然なやり取りをする姿からは想像できないが、もともと、秋田とは全く縁がなかった。兵庫県姫路市の靴店の長男として生まれ、高校まで兵庫で過ごす。そんな中「幼いころ、野口英世やアフリカの無医村で医療を行ったシュバイツァーなどの伝記を読んで医師にあこがれた」と言い、更に高校生とき「農村医療を提唱・確立した若月俊一先生の名著『村で病気がたたかう』を読んで農村医療を志すようになった」と振り返る。

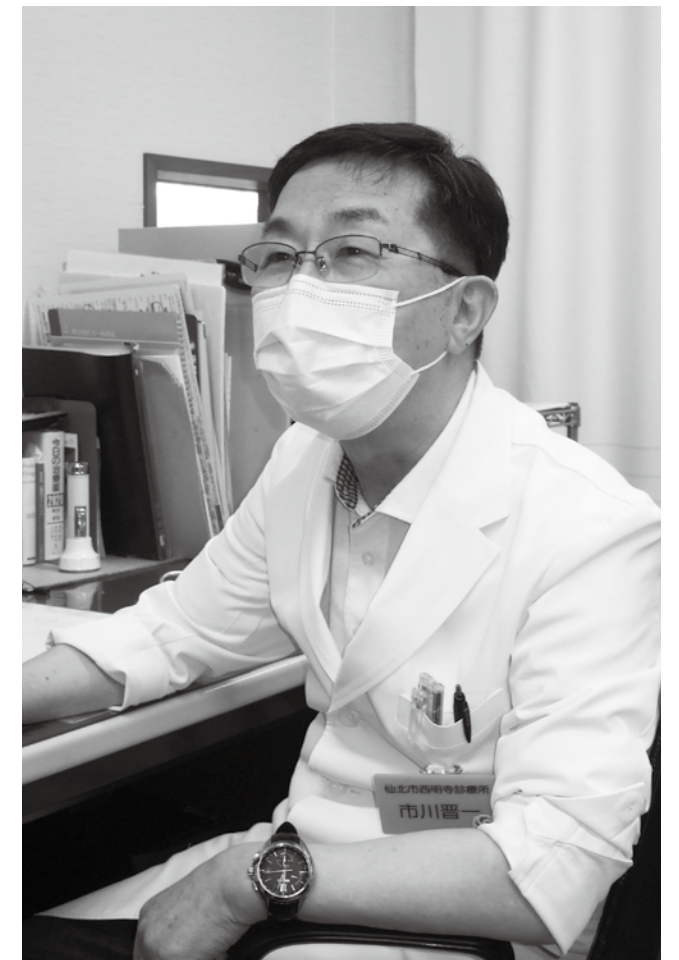
秋田の人の優しさに触れ

東京で予備校生活を送り、合格したのが秋田大医学部。そこで「秋田の人の優しさと自然の美しさに魅了され」、この

地で農村医療を実践することを決意した。

大学では実習での人工透析に興味を持ち、腎泌尿器科の講座を選んだが、将来の少子高齢化を見越していた教授の「排尿障害を始め、多くの高齢者が関係する泌尿器科が今後ますます重要になってくる」との言葉に共感し、泌尿器を専門に。更に、研究の経験も積んで厚みのある農村医療を実践したいとの考えから大学院に進み、排尿障害の疫学的研究などを行った。

大学院修了後の昭和60年、JA仙北組合総合病院(現・大曲厚生医療センター)の泌尿器科長となるが、「座して患者を待つだけの医療ではいけない」との信念から、総合病院での診療の傍ら、寝



秋田弁で患者と心をつなぐ市川所長



診療所のスタッフと



診療前のスタッフカンファレンスで

たきりやがんの進行などで通院が困難となった患者らを診るため、車で1時間かけて定期的に西木村に通っていた。介護保険制度もなく、「訪問診療」という言葉がまだあまり一般的でなかったころのことだ。

そんな中、「自分は農協の病院に勤めているが、本当に農民のための医療ができているのか」との思いを持ち続け、定年になったら農村に入って本格的に農村医療を実践しようと考えていた平成11年、50歳を前に転機が訪れる。



市川医師らの尽力で3倍の広さに建て替えられた診療所

当時の西木村の村長から「村の診療所に来てほしい」と懇願された。翌年に介護保険制度がスタートすることもあり、医療と福祉をつなぐことのできる医師を探していた村と、福祉や行政と連携した医療を行いたいと思っていた市川医師とで思いが一致。村も全面的にバックアップすることを約束したため、翌年4月、家族で西木村に移住し、西明寺診療所の所長となった。

当時、西明寺診療所は赤字で、医師に対しても「高給取りだが働かず、定着せずになくなってしまおう」と微妙な感情を持つ住民も一部おり、医師を信用して継続通院してくれる患者も多くはなかった。着任後、「本が1冊書けるほど苦労した」と言うが、「信用を得るため、24時間365日、どんな患者でも断らない」との志を持って誠実に診療する市川医師の姿勢を住民が見逃すはずはなく、感謝の言葉とともに継続受診する患者も増え、1年で黒字に転換した。「市町村の診療所で黒字というのは全国的にも珍しいのでは」と語る。



特別養護老人ホームの嘱託医も務める。回診で入所者と



仙北市高齢者の保健事業支援委員会の委員長を務める



訪問診療先の玄関で

西明寺診療所の待合室で診察を待っていた60代の男性患者に話を聞くと「先生が村に来てくれて、しかも明るい人で、みんな喜んでいる」と話し、「この診療所があるおかげで、“何かあっても角館までわざわざ行かなくて大丈夫”という安心感がある」とも。

週1回の桧木内診療所での診療の後は、近くの特別養護老人ホーム「清流苑」の嘱託医として、同施設での回診も担当する。

一人では何もできない

このほか、仙北市の職員でもあるという立場か

ら、行政の会議のまとめ役を依頼されることも多い。取材した日も診療後の午後6時から、仙北市役所角館庁舎で、同市の「高齢者の保健事業支援委員会」が行われ、第1回でもあったことから市川医師が満場一致で委員長に推挙され、さっそく会議を取り仕切る立場となった。

メンバーの歯科医、薬剤師、介護支援専門員らとともに、住民健診を受けず、医療機関も受診していない人に対して介護・疾患予防の観点から、健診を受けてもらえるよう、どう伝えていくかについて議論した。終了後、「これだけでなく、他のさまざまな会議の委員にもなっている」と教えてくれた。

「一人では何もできない」と繰り返す市川医師。

取材は年末に行ったが、週1回の桧木内診療所に車で向かうのに同行した際、途中、「寄りたい所がある」と言って消防署の前で車を止めた。出てきた署員に「1年間ありがとうございました。来年もよろしくお願いします」と挨拶し、署員が恐縮している姿が目に入った。

今回の受賞を祝い、地元では有志により「紙風船上げ」が行われた。武者絵や美人画が描かれ、明かりをともした巨大な紙風船が夜空に上げられる上桧木内の伝統行事で、秋田県を代表する冬の風物詩として知られる。本来、毎年2月10日に行われるが、受賞を喜ぶ人たちが記者の訪問に合わせ、特別に診療所の駐車場で上げてくれたのだ。

市川医師がどれだけ慕われているか、これほど分かりやすいシーンはなかった。

(山本雅人)



市川医師の受賞を祝い、有志が地元年中行事の巨大紙風船を上げる



(三尾郁恵撮影)

「主人」である患者の要望を最大限に

シャローム病院 院長

鋤柄 稔

《 埼玉県 》

すぎがらみのる シャローム病院院長。昭和22年、埼玉県東松山市生まれ。75歳(2022年5月12日時点)。信州大学医学部を卒業後、埼玉医科大学附属病院に入局。平成6年、同大助教授を退職し、同年、故郷にシャローム鋤柄医院を開設。25年、シャローム病院へ改称。地域で唯一の緩和ケア病棟を開設し、がん患者のホスピスケアを本格的に開始した。

患者の看取りに向き合い、寄り添う

病院名の「シャローム」とは、ヘブライ語で平和や平安を意味する。「すべての看取りが“シャローム”であってほしい」と懇願する鋤柄稔院長の信念が込められている。病気を治すことだけを目的としない「患者本位」の医療を四半世紀にわたって実践してきた。

人生の転機は42歳のときに訪れた。米国ペンシルベニア州のピッツバーグ大学で肝移植について学んでいた頃、急性肝炎を患った。

当時は国内外を問わず、がん告知を行わない時代。末期がんの患者が真実の病名を知らないまま最期を迎えていた。異国の地で自ら患者となり、生老病死と向き合った経験が開業のきっかけになったという。

人口約9万人。埼玉県のほぼ中央に位置する東松山市。「どんな人生にも苦難が尽きない。生まれ育った地に戻って患者とその家族に寄り添う医療をしたい」。大学病院の助教授職を辞めて、終末期ケアを含む地域に根差した医療を行う診療所を開設した。

先人と妻の教えを心に

「患者は主人で、われわれは召使いである」——。100歳を過ぎてなお、現役医師を続けた聖路加国際病院（東京都中央区）の日野原重明元名誉院長（故人）の言葉を肝に銘じてきたという。

「医師は患者の希望、やりたいことをどこまで聞いてあげられるのか。患者に仕えて、言葉は適当でないかもしれないが、患者の“召使い”になり切ることをずっと心がけてきた」

敬虔なクリスチャンだった妻、美幸さんが開設当初から職員として支えた。毎日、末期がんの患者の枕元で「そのままでもいいんだよ。神様はそんなあなたのことを愛しています」と励まし続けたという。

患者のだれからも「みゆきさん」「みゆき先生」



「患者本位の医療に徹することが大事」と語る

などと慕われてきたが、平成11年、病に倒れ、40代の若さで急逝した。その後、有志の患者や病院の職員らによって追悼集「そのままでもいいんだよ」が編まれた。

〈ひとりぼっちではないんだと思えることが、これからの私の人生に希望を与えてくれます。ありがとうございます（美幸さん）〈末期の方々のベッドの傍らでじつと患者さんの話に耳を傾け、祈っていた姿を思い出します〉（抜粋）

妻の遺志を継いだ夫は「患者は医療に何を求めているのか」を自らに問うた。患者と肩を並べてたわいない話をしたり、病室にたたずんで患者と歌ったりすることもあった。

日々の回診では患者の手を握るのが日課になった。患者は院長の手を力を込めて握りしめるという。医師と患者は日々の何気ないルーティンを通じて心を通わせてきた。



回診で患者の手を握り語り合う

患者一人一人の要求を聞き入れたいという揺るぎない想い

新型コロナウイルスが猛威を振るう前は「院内ウエディング」や「院内葬儀」も珍しくなかった。患者のペットを病室に入れたり、家族がいつでも患者に会える「24時間面会」をかなえたり。院内での飲酒や喫煙も許された。患者一人一人の要望をていねいに受け入れ、病院の決まりを理由に異を唱えることはなかったという。

死期が迫るある患者からはインドを代表する詩人、タゴール（ノーベル文学賞受賞）の作品を朗読してほしいと頼まれた。

《今日 わたしの頭陀袋は空っぽだ——
与えるべきすべてを
わたしは与えつくした。

その返礼に、もしなにかがしかのものが——
いくらかの赦しが得られるなら、
わたしは、それらのものをたずさえて行こう
終焉の無言の祝祭へと
渡し船を漕ぎ出すときに》

人の生死を深く考察した詩聖・タゴール。死を目前にして「最後のうた」の一節を静かに聞いていた患者は院長に訴えた。「おれのごみを処分してくれないか」。「ごみ」とは財産のことだった。患者の死後、土地などの財産の一部が病院に寄付されることになったという。

医療看護の「原点」は変わらない。コロナが収束すれば、患者一人一人の要求を再び聞き入れたいという。

年間400人以上の患者を看取ってきた。「死を前にしたからといって、医師として特別なことを患者



診察で患者の話じっくり聞く



訪問診療先で患者やその家族と



訪問診療先で患者に声をかける



病院内 慈愛のあふれる言葉が連なる

にするわけではない」。鋤柄院長はさらりと言う。

農作業で自然に触れるのが何よりの休息

入院、外来、在宅一。日々、死と隣り合わせの分刻みの“時間割”から離れると、さまざまな生命をはぐくむ大地をいつくしむ。白衣から作業着に着替え、長靴に履き替える。病院裏山にある畑と雑木林にさっそうと出ていく。

妻の死後、登山が趣味になったといい、足腰に

は自信があった。

「病院では気を休める時間を持ってない。だから、農作業と林業がほくにとつての最大の息抜きになる。何時間、畑や山にいても不思議と疲れない」

畑ではなんでも作る。イモ類、ダイコン、ネギ。シイタケ栽培も本格的だ。自宅の暖炉では伐採した薪をくべ、採れたての野菜を食卓に並べる。病院のスタッフに収穫した野菜をおすそ分けすることもある。

赤ひげ先生は自分の目指す姿である

「赤ひげ大賞」の受賞が決まってから、賞の由来である作家、山本周五郎の時代小説『赤ひげ診療譚』^{しんりょうたん}を手にとったという。

「どんな境遇の患者に対しても分け隔てなく治療を施す赤ひげ医師の姿は、自分が目指してきた医療に通じるものだった」

筋ジストロフィーを抱えるある男性患者の訪問診療にお付き合いさせてもらった。一見、意思の疎通が難しい患者が相手でも、いつもと変わらぬ態度で雑談し、ユーモアと慈愛にあふれる言葉を投げかけていたのが印象的だった。

平成25年、病院名から「鋤柄」の名を削ったのは「病院とは個人の財産ではなく、地域の持ち物である」という院長の思いがあったからだという。地元の「比企医師会」は鋤柄院長を推薦した理由について「人生をかけて骨身を惜しまず地域医療に尽力し、地域の緩和ケアの芽を育て上げた」と説明する。

28年前、生家の隣に開設した診療所は、いま、地域社会に24時間開かれた「窓」になっている。

(日出間和貴)



野菜作りが趣味。病院近くの自身の畑で



(飯田英男撮影)

依存症の治療一筋／限度のない愛を患者に注ぐ

大石クリニック 院長

大石 雅之

《神奈川県》

おおいし・まさゆき 大石クリニック院長。昭和29年、広島市生まれ。68歳(2022年5月12日時点)。東京慈恵会医科大学を54年に卒業後、同大麻酔科に入局し、56年には同大精神神経科に入局した。麻酔科標榜医、医学博士、精神保健指定医。平成3年に栃木県立岡本台病院の診療部長を退職し、横浜市中区で大石クリニックを開業した。

白衣はまとわず

まなこ
眼に温情をたたえ、優しくほほ笑みながら穏やかに患者に話しかける。「職場には慣れましたか」「もう一人でできるようになりましたか」…。男性の患者はその問いに、「自分なりに慣れた」などと真面目に答える。打ち解けた雰囲気醸したやり取りからは、双方に信頼関係が成立していると知れる。

横浜市中区にある大石クリニック7階の「room4」。大石雅之医師が普段、診察で使っている部屋だ。この患者はアルコール依存症を克服し、順調に社会復帰できている。だが、大石医師は言う。「再発しないよう、サポートをすることが大切です」。きちんと患者が回復するまで、気を抜くわけにはいかない。悄然としてうつむく依存症の

患者に日常を取り戻させてあげたい。そうした信念を貫いて、これまであまたの患者と接してきた。

大石医師は、ジーンズに黒色のカッターシャツという装いで、その他の医師もスタッフも白衣をまとっていない。ときとして冷淡な印象を与えかねない白衣をあえて身につけず、患者が身構えないようにしている配慮なのである。

「入院」でなく「外来」で

大石医師はもともと、麻酔科医だった。だが、患者と相対する中で、話す内容や拳措(きょそ)を分析し、病状を回復させる診療科に魅力を感じ、精神科医になった。依存症の中でもアルコール依存症の治療に携わってこのかた、今にいたる。

アルコール依存症の療法はかつて、「入院」さ



穏やかな笑顔で患者に話しかける

せて患者の自由を拘束し、飲酒をさせない「断酒」の考え方が主流だった。「病院でも酒を飲み、そして騒ぐのだから致し方ないか。いや、別の療法があるはずだ」。そう思い悩んでいたところ、日雇い労働者らが集う大阪市西成区のあいりん地区（通称・釜ヶ崎）で、ある精神科医が「外来」治療で実績をあげていると耳にした。

クリニックに出向き、診療の様子を見させてもらい、同じ悩みを持つ人たち同士で話し合わせたりする取り組みなどの大切さを学んだ。昭和50年代のことだった。

「『アルコール依存症には、外来の療法は無駄



「患者に日常を取り戻させてあげたい」と語る

だ』と言われていた時代です。けれども、入院させて閉鎖病棟に入れるなんて人権侵害だと思ってきた」

依存症を専門に扱うクリニックとして横浜市中区で開業したのは、平成3年のときだった。それ以来、アルコール依存症に限らず、さまざまな依存症患者を診察してきた。

依存症は大きく3つに分けられる。アルコールやたばこのほか、覚醒剤などの薬物に起因する場合は「物質依存」とされ、ある行為をする過程を楽しむギャンブルや窃盗癖、買い物などは「プロセス依存」と呼ばれる。ドメスティックバイオレンス（DV）やストーカーといった人と人とが絡む依存症は、「関係依存」に分類される。いずれも快楽や刺激を得たくて手を染めてしまうことは共通している。

大石医師が精神科医を志した当時、依存症といえば、アルコールと薬物だった。現代では、これほど多くの依存症が存在しており、精神科医の存在感は増すばかりなのである。

開業資金がない

「釜ヶ崎」で見聞したあらゆることが血肉となり、精神科医としてやっていく道筋に光明が差してきた。だが開業の際には、資金を調達できない難儀に見舞われた。東京都内にマンションを購入したばかりで手元は不如意。当時はまだ、依存症専門の精神科クリニックを開業したい人物に、融通する金融機関はなかった。先輩医師からは「内科を併設した方がいい。精神科だけでは経営が成り立たない」とも助言された。

「とても困ったが、『当然だろうな』と冷めた自分もいた」

それでもどうにか親類のついでで調



クリニックのスタッフと



妻の裕代さんと

達できた。だが寂しいことに、事務員や看護師らを含め、たった4人で迎えた門出だった。

寿の人たちに愛の手を

横浜市中区に位置する寿地区の存在はたまたま知った。開業する前、妻の裕代さんとドライブがてら市内の中華街まで頻繁に食事に来ていて、通りすがった際、周辺と風景がだいぶ異なる場所があり、それが寿地区だった。多くの日雇い労働者らが明日をも知れない暮らしを送っている。「釜ヶ崎での経験が寿の人たちに生かせる」。そう思念した。

「仕事はない、住む家はない、家族はバラバラ。これでは生活ができない。せっかく刑務所から出所した人でも、こうした状況に置かれたらおのずと再犯率も高くなってしまう」

依存症の治療では、患者の身体、精神など多岐にわたって気を配る。相対で患者の心身がどんな状態であるのか把握し、最適だと思われる療法を採用していく。同じ問題を抱えた幾人かの患者がフリートークをする中で励まし合ったりする「集団精神療法」や、抗酒剤やお酒を飲む気持ちを低減させる薬を使う「薬物療法」、自らの心と向き合い、存在価値や責任を自覚させる「内観療法」など、確立された療法がさまざまあり、併用するなどしていく。

クリニックで治療を受けて回復した人には、仕事場も用意する。老人デイケアのスタッフとして、公園などの清掃員として…。グループホームを設立して住まわせたりもしている。こうして精気を蘇らせる。経過観察はもちろん、怠らない。

依存症の専門クリニック

大石クリニックの年間の新規受け入れ患者数は現在、約2千人に及び、来院者数は約7万人を数える。厚生労働省からは平成30年、アルコールや薬物、ギャンブル依存症の専門指定医療機関に認定

され、令和3年にはストーカー行為の加害者を治療する施設として神奈川県警から委嘱されるなど、精神科医の医療施設として高い評価を得ている。

あるべき依存症の療法を絶え間なく希求し続けた大石医師の営みが、こうした評価に結実している。もとより、同じ姿勢をこれからも貫く。

(松本浩史)



クリニックの玄関で



大石クリニックのビル



(山本雅人撮影)

島の歴史とともに歩み、島民の健康第一に

佐藤医院 院長

佐藤 立行

《 熊本県 》

さとう・たちゆき 佐藤医院院長。昭和2年、熊本県郡浦村(現・宇城市)生まれ。95歳(2022年5月12日時点)。熊本医科大学附属医学専門部(現・熊本大学医学部)卒業後、国立戸馳療養所に内科の医師として勤務、後に副所長。同療養所が統合・移転し国立療養所三角病院となると副院長に。昭和60年、戸馳島で佐藤医院を開業。

結核療養所の内科医に

八代海に浮かぶ戸馳島で唯一の医療機関として、島民が気軽に訪れる佐藤医院。その玄関に掲示された診療科目には「内科」に加え「麻酔科」とあり、やや不思議な感じを受けるが、それこそ、島の歴史とともにある佐藤医師の歩みを表している。

実家は島の対岸にある宇土半島の郡浦にあった並河医院。もともとは漢方医の家系だったが、明治時代に私立熊本医学校ができると祖父は西洋医学の道へ進んだ。同窓には日本の細菌学の礎を築いた北里柴三郎がいたという。父は軍医として従軍後に並河医院を継ぎ、長兄も軍医を務めるなど身近な職業だった。

だが時代背景もあり、自身は「海軍士官にあこがれ、海軍兵学校に行きたかった」と言う。父親はいい顔をしなかったが、いざ受験すると「海軍兵学校は落ちてしまい、熊本医科大学附属医学専門部（現・熊本大学医学部）を受けると合格。その結果に父は喜んだ」。今度は海軍軍医になることを望んだが、在学中に終戦となった。

卒業後、研修医の期間中に戸馳村長の長女、圭子さんと結婚、妻の実家である佐藤家の婿養子となる。ちなみに、村長だった佐藤鶴亀氏は、三角町長として、昭和48年にそれまで渡し舟で行き来していた戸馳島と対岸を結ぶ戸馳大橋を建設した人物で、橋のたもとには銅像が建立されている。

研修を終えた昭和28年、内科医として結核療養所である国立戸馳療養所に赴任、島で患者の治療に奔走することになる。橋はまだなかった。当時、結核は国民病といわれ、亡くなる人も多かったことから感染を恐れ「島民の中には、療養所の前を通る際に呼吸を止める人もいた」と振り返る。

「多いときには200人以上の患者がいた」という療養所では患者に対し、肺の一部を切除する手術なども行われており、内科医である佐藤医師は麻酔を担当した。「全身麻酔について勉強するため、



特養ホームでの回診風景。94歳（取材当時）とは思えぬ足どり

当時の所長が福岡の療養所まで研修に行かせてくれたので専門知識を習得することができた」。また、厚生省（当時）の麻酔科標榜医の資格も取得した。現在の佐藤医院の診療科目に「麻酔科」があるのはこのためだ。

島民のため開業を決断

所長は研究も奨励した。当時、結核の患者にとって日光に当たることがよいとされていたが、長時間当たると皮膚への刺激が強すぎる。そこで「データを取りながら、最適な紫外線量はどの程度かという研究をさせてもらった。所長には今でも感謝している」。



佐藤医院の玄関で。診療科目の「麻酔科」に注目



特養ホームの入所者を診療

療養所では結核の入所者だけでなく島民への一般診療も行っており、島で唯一の医療機関という側面もあった。

そんな中、ストレプトマイシンなどの特効薬が開発され、「薬で治せる病気」となった結核の患者は徐々に減少。全国の療養所は統廃合されることとなり、30年近く勤める戸馳療養所も、いつその対象になってもおかしくない状況となった。佐藤医師は「地域の核となる病院を残したい」との思いから立ち上がる。「所長とともに当時の厚生省や町役場を回って陳情した」と言う。

57年、戸馳療養所は国立療養所三角病院（現・



特養ホームの職員に新型コロナワクチン接種を行う

済生会みすみ病院)として、対岸の三角町の高台に移転することとなり副院長に。ただ、それは療養所は残ったものの、島からは医療機関がなくなることを意味していた。

佐藤医師は島民のことを考え続けた。「身近なかかりつけ医で診察し、必要に応じて大きな病院を紹介する。そんな医院が島にあるだけで住民は安心できるのではないか」。よい医療を提供するために役割を分担して協力し合う「病診連携」を自ら率先して行おうと3年後、副院長の職を辞して、島での開業を決断した。59歳のことだった。

平成12年に介護保険制度が始まるまでは近隣に高齢者施設もあまりなかったことから、島では寝たきりの患者らの訪問診療することも多かった。家族に献身的に世話をしてもらえる人、そうでない人など、さまざまだった。中でも印象に残っているのは実子がおらず、養子と暮らしていた高齢の女性。「あまり面倒を見てもらっていなかったようで、訪問診療の際、私に『100の歳より子が宝』と言った。最晩年は施設に入所できて幸せに過ごせたのでよかったが…」と述懐する。

人望ゆえ医療以外にも

現在は島での診療のほか、対岸にある特別養護老人ホーム「豊洋園」の嘱託医として週2回通い、入所者の診療も行っている。スタッフの女性は「佐藤医院だけでなく、三角病院の副院長の時代に患者だったという入所者も多く、先生が来ると安心して合掌する人もいます」とし、「認知症の人でも先生のごことは分かるようだ」と話す。

記者が取材した日は佐藤医師が同園を訪問する日で、園のスタッフらに新型コロナウイルスの3回目のワクチン接種

を実施。30人以上に対して、94歳とは思えない手際の上で次々と接種を行っていた。

住民のために自らを犠牲にし、人望のある佐藤医師を役場も放っておくはずがない。国家公務員(副院長)を辞して兼業禁止が解けると同時に三角町の教育委員に任命された。16年間にわたって務め(うち7年間は委員長)、その間、少子化に伴う小・中学校の統廃合という難しい問題に取り組む。「自分の学校がなくなることをよく思う人はいないが、スクールバスの手当てなど、できるだけのことをして基本計画をまとめた」。平成16年には文部科学大臣表彰を受けた。

ほかにも、熊本県警の嘱託医を長年務め、地域で不審死の事案が発生した際は昼夜問わず対応、県警からも感謝状が贈られている。

医師になって約70年。今回の受賞について「自分のような者がいただいているのか」と自問しながらも、「身体の続く限り、島民のために尽くしたい」と語った。

(山本雅人)



戸馳島の中心近くにある佐藤医院



警察の嘱託医としても長年貢献



佐藤医院のスタッフと

赤ひげ功労賞 受賞者

(順列は北から)

	今金町介護老人保健施設 所長 楯 秀貞	北海道
	今村クリニック 院長 今村 憲市	青森県
	松戸クリニック 理事長 丸山 博	千葉県
	昭和大学病院 呼吸器・アレルギー内科 講師・診療科長補佐 鈴木 慎太郎	東京都
	吉田医院 副院長 吉田 まゆみ	福井県
	露木耳鼻咽喉科医院 院長 露木 弘光	山梨県

	河合クリニック 院長 河合 俊	静岡県
	西城外科内科 院長 西城 英郎	三重県
	京丹後市立久美浜病院 病院長 赤木 重典	京都府
	もり内科クリニック 理事長・院長 田仲 みすず	大阪府
	円山医院 院長 円山 忠信	広島県
	星子医院 副院長 星子 卓	福岡県
	木原医院 院長 木原 晃一	鹿児島県



日本医師会 常任理事

城守 国斗

赤ひげ大賞ならびに赤ひげ功労賞受賞者の皆様、このたびは誠におめでとうございます。

第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考の経過をご説明させていただきます。

第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年5月21日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書を発出し、ご推薦をいただきました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました10名の選考委員で「候補者推薦書」による事前審査を行い、その結果を基に、11月5日、日本医師会館で選考会を開催いたしました。その中で、「赤ひげ大賞」の受賞者5名ならびに「赤ひげ功労賞」の受賞者13名を決定し、本年1月6日に、今回の結果を公表、本日の表彰式を迎えるにいたしました。

受賞された先生方は、長年にわたり、地域住民の健康確保に親身に取り組んでこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、受賞者には本賞にふさわしい方々を選考できたと考えております。

新型コロナウイルス感染症の影響が長引く中、かかりつけ医をもつことの重要性とともに、期待されるその役割もますます増えています。

本賞が、各地域の先生方の励みになり、地域医療の更なる充実や後進の育成へとつながることを願っております。

以上、経過のご報告とさせていただきます。

ありがとうございました。

日本医師会 赤ひげ大賞

- | | |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 主催 | 日本医師会、産経新聞社 |
| 後援 | 厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ |
| 協力 | 都道府県医師会 |
| 特別協賛 | 太陽生命保険株式会社 |
| 対象者 | 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。 |
| 推薦方法 | 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦 |
| 受賞発表 | 産経新聞紙上 |
| 選考 | 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定 |
| 賞状と副賞 | 賞状、記念盾及び賞金等 |

元気!長生き!



赤ちゃんに会えるの
たのしみだね。



NEW

出産 保険

楽しいことがいっぱい。
でも、心配なこともたくさんある。
そんな声にお応えして、うまれました。

お母さんになる喜びのかたわら、不安があるのはみんな一緒。
すこしでも、みなさんの気持ちに寄り添えるように。
産婦人科のお医者さんをつくった、新しい保険です。

妊娠21週までご加入いただけます。保険料は月々1,000円台から!

所定の妊娠うつ・産後うつ、所定の重症型妊娠高血圧症候群、
出産時における輸血治療を保障!

妊婦健診で発見されることもある“がんを保障”

最高100万円

保険期間は“2年間”

2年後には、うれしい満期保険金つき!

最高50万円



●当保険商品は、契約時の妊娠月数等により保険料が異なります。●記載の保険商品の名称は愛称を記載しています。●産前産後ケア給付金における、所定の重症型妊娠高血圧症候群と医師によって診断された場合の保障および、出産に伴う所定の輸血を受けたときの保障は、保険契約締結の際に被保険者が妊娠していた子の妊娠・出産によるものに限ります。●詳しい保障内容等は、ご契約のしおり・約款をご確認ください。

さあ、保険の新次元へ。
T&D 保険グループ

スマホ保険専用ダイヤル (通話無料)

0120-95-1528

営業時間:月~金9時~18時 / 土・日9時~17時 ※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します。



太陽 出産

